

園庭田んぼのわら細工 資料
背景とその実際について

令和3年1月

「わら」の意味 わらとは何か
園庭田んぼでの「わら」工作
園庭田んぼの根っこ

「わら」の意味 わらとは何か

1. 日本の暮らしを支えてきた「わら」

おこめを育てると必ず残る葉と茎がわらです。

農家の人たちは、このわらを素材として様々な日常生活の道具を作り使い続けてきました。それは衣食住、運搬、包装、遊具、神具などあらゆる場面で使われてきました。その大部分はプラスチックやビニールなどにとってかわりましたが、現在でも神仏関係でわらが使われています。

<昔のわらの道具の例>



▲ひつ入れ（ご飯が冷めないように鍋釜をいれたカゴ）



▲草履



▼鍋敷き



▲ゆき蓑（みの）昔の合羽

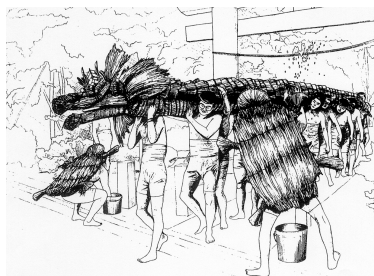


▲背中あて（運搬具／防寒具）



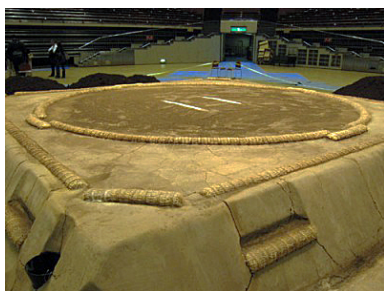
▼かんじき（雪道の歩行用履き物）

▲わら沓



雨乞い竜（春日神社：川崎市中原区）

<いまのわらの例>



相撲の土俵



門松



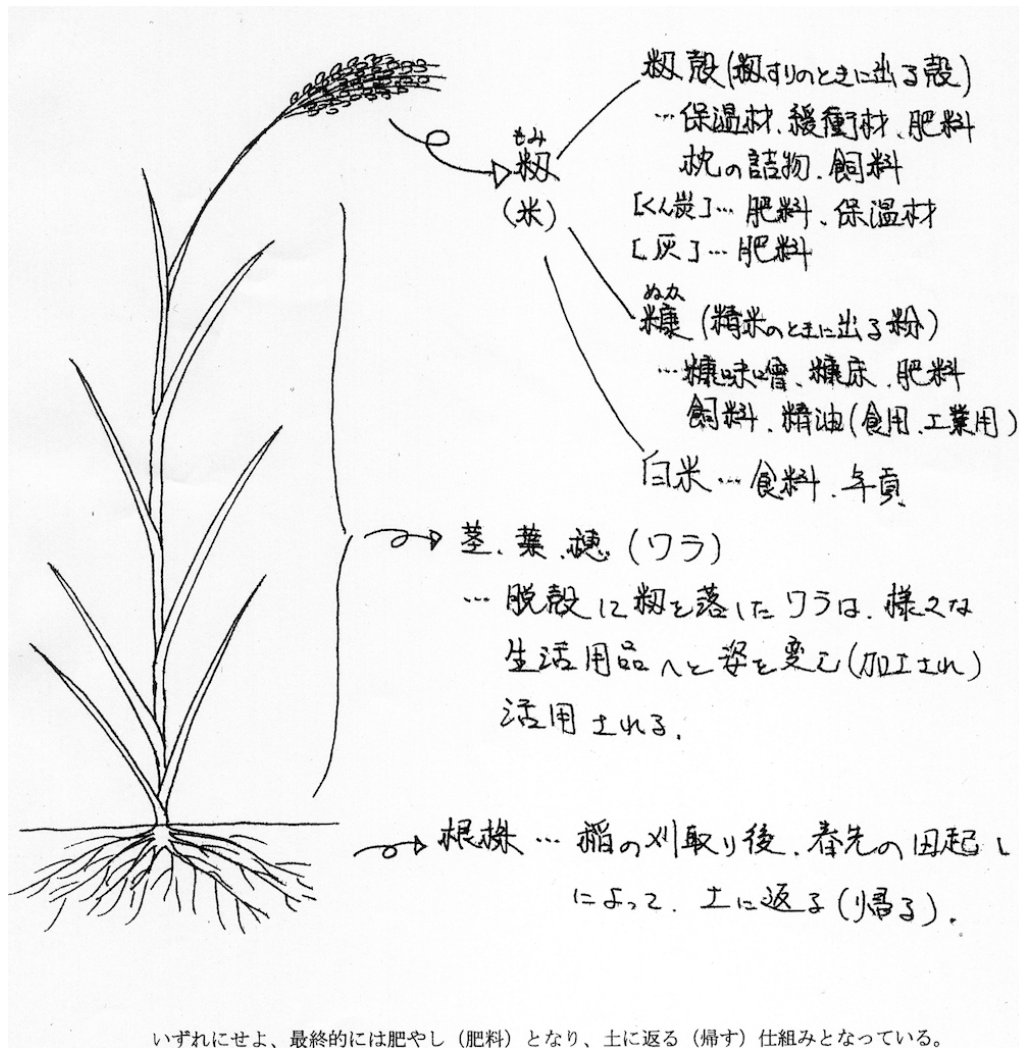
しめかざり



ねこちぐら

2 捨てないわら・イネ

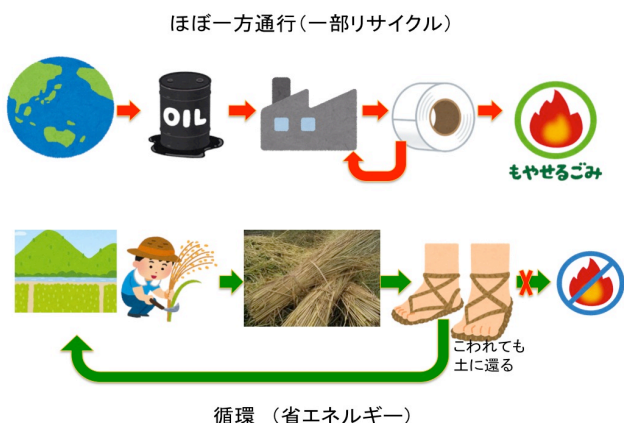
「わらを燃やすとわらわれる」といわれたくらいに、わらは捨てたり燃やしてゴミにしてしまうことのない存在でした。それはわらに限らず「イネ」全体が同じで、あらゆる部分が残さず使われていました。



また、捨てないイネ・わらは「循環型作物」でとてもエコロジーな存在でした。わらからプラスチ

ックになったことで問題も出てきました。わらは再生可能資源・循環型資源でしたが、プラスチック類は原料が化石燃料で、一方通行の消耗型資源であることです。また最近問題となっている海洋プラスチックごみの原因にもなっています。

こうしたことから「わら」がすぐれた素材であったといえます。



園庭田んぼでの「わら」工作

種まきからお米の収穫、わらの活用（工作、田んぼへの鋤きこみ）という流れで年間を通して「田んぼ」にかかわります。

わらの工作は、いく種類かご提案しています。それをもとに園、保育者で検討して子どもたちと楽しんでもらいたいと思います。

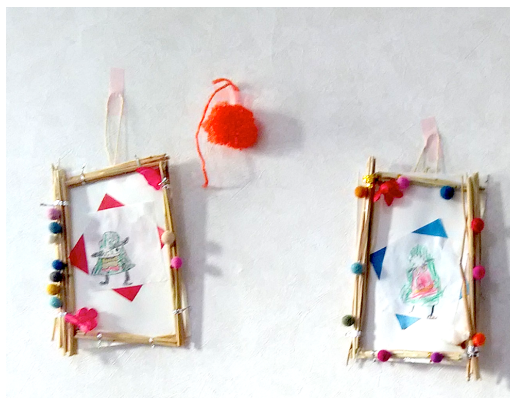
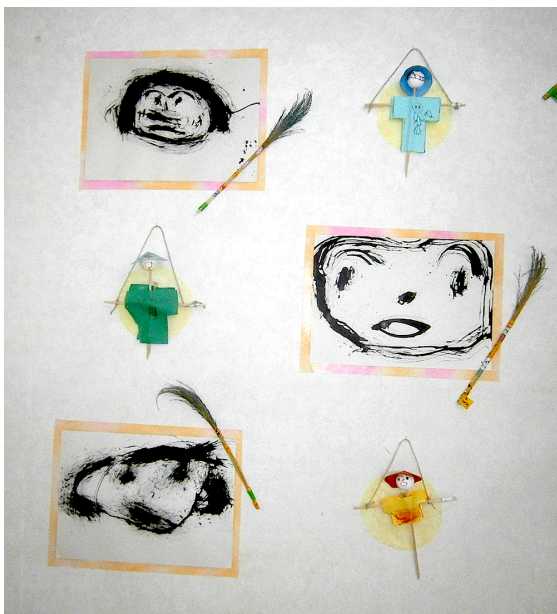
1 わら全体を使う

わら人形

- (1) わらっこ
- (2) トントン相撲
- (3) わらの動物

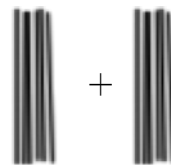
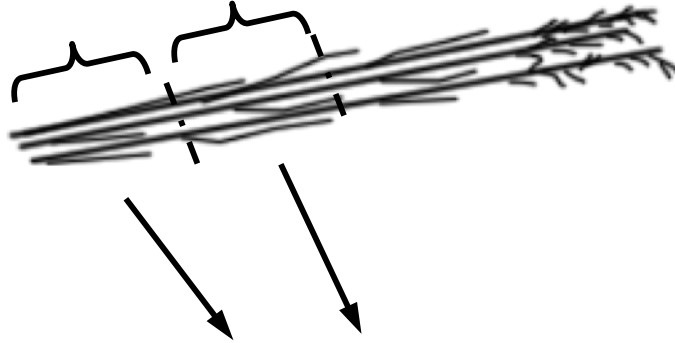
2 道具類をつくる

- (1) わら筆／わらほうき
- (2) わらフレーム
- (3) わらリース／しめかざり



トントン相撲人形の作り方

10cm くらいの長さに切る

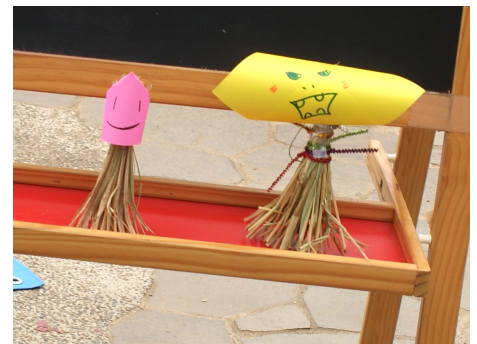


切ったわらを
あわせて好きな
太さに束ねます。

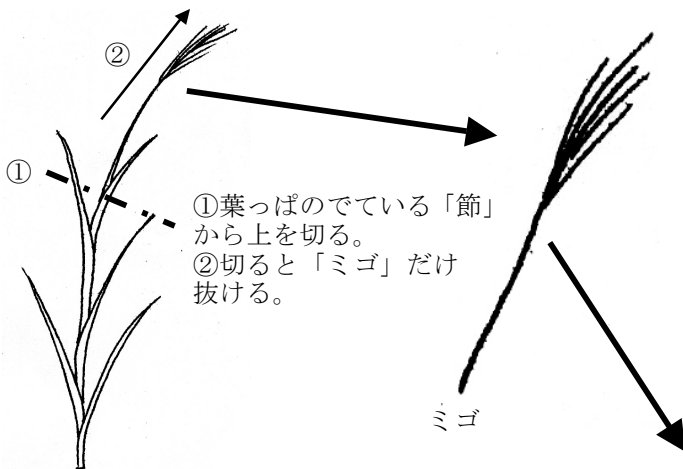


適当なところを紐やモ
ールなどで結びます

折り紙やモール、毛糸等で装飾をして
できあがりです。



わら筆の作り方



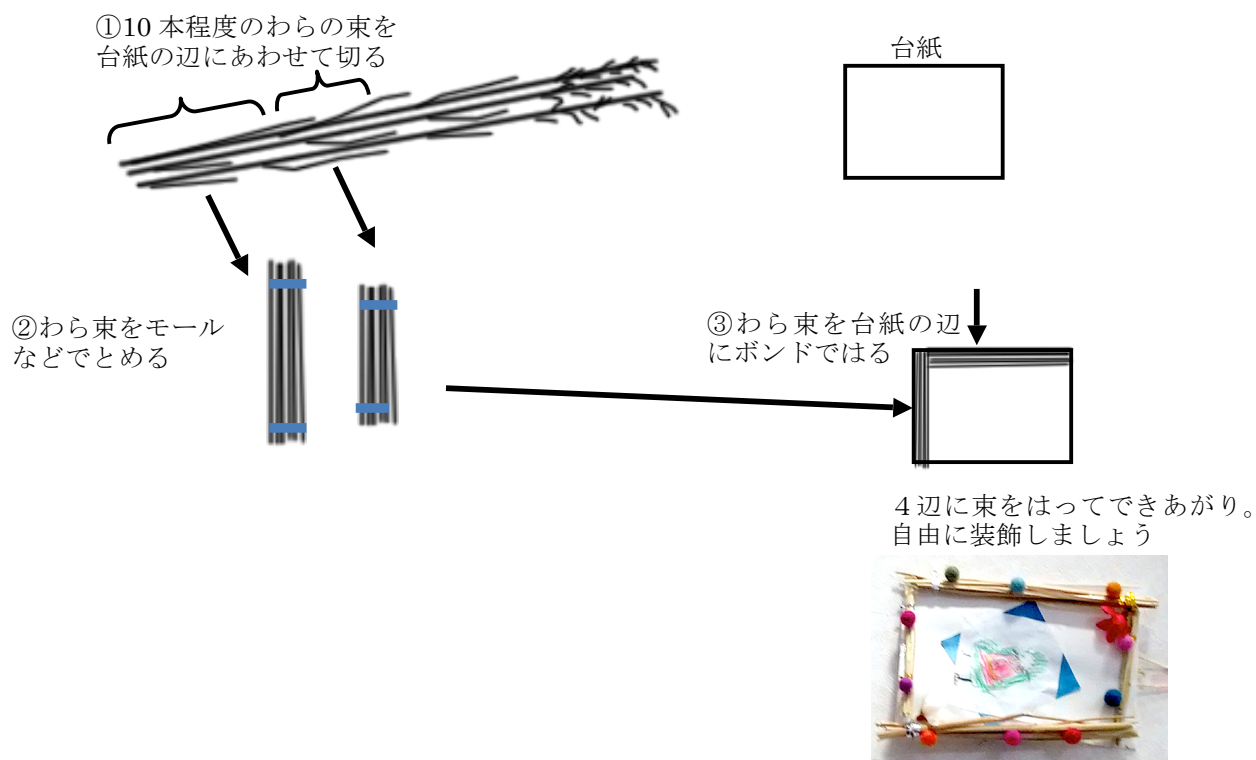
①葉っぱのでている「節」
から上を切る。
②切ると「ミゴ」だけ
抜ける。

ミゴ

ミゴを 10～15 本束ねて 2 か
所をテープでとめる。



わらフレームのつくりかた



わらっこのつくりかた

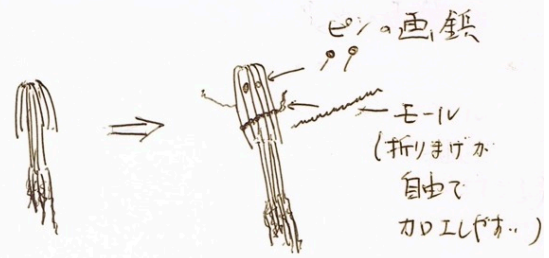
← “はかま” は とる

一体に使うわらの量はひとにぎり程度

12~20cm
下こ糸などで
しっかりむすぶ

根から 15 センチ程度のところをひもで結ぶ
ひもの部分からバナナの皮をむくように外側にわらを折る。

ひも
部分に
霧吹き
などで
水をふりかける
↓
しらがやわらかくなり、折る時がよい。



目にピン画鋏を入れ、
モールで全体をむすび、思い思いの装飾をして



好きな高さに調節してはさみできれば・・・。

・装飾は自由に。

でまた人形は、ヒモをつけてぶら下げたり
ローソク立てのような台に立てたり
自由にどうぞ。



園庭田んぼの根っこ

現在のトロ舟田んぼを来年度使うために、土に空気をいれておきます。この時に、わら細工で残ったわらをこまかく（10cm くらい）切り、田んぼにいれます。土を掘り返し、根っことわらを混ぜ合わせます。こうすることで根っことわらが来年の田んぼの肥料となります。